

星をかすめる風

〔凡例〕

- 1 この作品はフィクションである。
- 2 この本の内容は当時の時代性と制度についてはさまざまな記録を基にし、収録されている詩は実際の作品にもとづいた。ただし、実在した人物の性格と行動は、小説として自然なように再構成したフィクションである。この点について、ご遺族ならびに関係者の皆様にご理解いただければ幸いである。
- 3 『正本 尹東柱全集』（ホン・ジャンハク編、文学と知性社）、「星を数える夜」（イ・ナムホ選、民音社 世界詩人選 三十）など、さまざまな編者による尹東柱詩集と『尹東柱評伝』（青い歴史）、「尹東柱 韓国現代詩人研究Ⅰ」（イ・ゴンチョン、文学世界社）、「我星にも春が来たら——尹東柱の生涯と文学」（コ・ウンギ、サンファ社）他、一人一人の名前を挙げきれないほど多くの研究者たちによる著書と研究資料、また尹東柱の実弟・尹一柱教授、詩人の延禧専門学校の後輩で、自筆の詩稿を保管し世に公開した鄭炳昱教授、友人で詩人の金禎宇など多くの知人の多様な著述資料を参考にしなかつたら、この本は世に出ることはなかつただろう。あらかじめお一人一人に了解を得ることができなかつた失礼を、紙面を通じてご理解くださるようお願いしたい。

プロローグ 消え失せたものが、蛍の光のようにさまよう

人生には生きる理由などなくてもいい。しかし死については、明確な根拠がある。死それ自体を証明するためではなく、残された者の人生のためである。十九歳の冬、私はその事実を知ることとなり、そして今の私がある。

砂に吹きつける風のように、戦争の時間は私をかすめて通り過ぎた。擦り減って粉々に崩れたりしながらも、私は少しずつ成長していった。成長は本来、祝福されるべきことだ。肉体の発育、知識の拡張、経験の蓄積……。しかし私にとって、成長とは不可逆な喪失にすぎなかった。

もう私は、かつての私には戻れない。世の中は残忍だという事実を知らなかった私、人間の悪魔のような側面について無知だった私、一行の文章が持つ力を知らなかった私には。

一九四五年八月十五日、戦争は終わった。拘禁されていた人々は皆解放されたが、私は今も変わらずこの刑務所にいる。変わったことがあるとしたら、鉄格子の外にいた私がいること、褐色の看守服から赤い囚人服になったということだけだ。私の囚人服の胸には黒い番号が鮮明についている。D二九七四五。

私になぜこの鉄格子の中に閉じ込められているのか、私にはわからない。知らないうちに、自分でもよくわからない巨大な出来事が私の運命を襲い、通り過ぎていっただけだ。

戦時中、福岡刑務所看守部で看守兵だった私は、戦後、進駐米軍によってBC級戦犯に分類され、自分が番をしていた正にその監房に収監された。高い煉瓦塀と鋭い鉄条網、太い鉄格子や煉瓦房でできたその巨大な怪物は、想像もできないほど多くの人々の魂を呑み込んだ。私の魂をもまた、この怪物は食べてしまうだろう。

薄黒くくすんだ床の上に白い陽が射した。たくさんの血と膿、ため息やうめき声が染みついた木の床。私は指を広げ、四角い紙のような光の中に何かを書いてみる。十九歳の私の魂は生き生きしているだろうか？ そのはずだ。私の筋肉はたくましく、皮膚はなめらかで、血は新しい葡萄酒のように赤い。しかし私の目はあまりにも残酷なものを多く見てきた。

太平洋司令部連合軍法務局は、戦時捕虜虐待の容疑で私を起訴した。戦時下の刑務所で勤務した看守兵だったのだから、当然の罪名だろう。自分に罪がないとは言わない。時に意図的に、時には自分でも意識しないうちに収容者を虐待したこともあるに決まっている。声を張り上げ、拳を振り上げ、むやみに殴りつけたこともあったはずだ。だから私に科せられた罪は、私が当然受け入れなければならぬ分け前だ。だが私には、米軍検察官に起訴されなかった別の罪がある。

「何もしなかつた罪」

私は悪魔が起こした戦争を食い止められず、その汚い戦争を止めることもできず、罪のない、ひよつとするとほんのわずかな罪しか犯さなかつた人々が、あえなく死んでいくのを止められなかつた。悪魔の狂気に沈黙し、罪のない者の悲鳴に耳を塞いだ。

あなたは問うだろう。何もしなかったことが、どうして罪になるのかと。犯罪とは、どんな行為をしたかによって成立するものではないのかと。私は、その質問に答えるために書き進めていくつもりだ。

今から話すことは、私自身のことではない。それは人間の魂を滅ぼす戦争と、罪のない人が死んでゆく残酷な話だ。私が見た人間と人間ではない者について、最も純潔な人間と最も墮落した人間について、そして暗い宇宙を横切ろうとし、幾万年も前の星のまぶしさについての話である。

もう私はわかった。世の中がいかに残忍で、人間がいかに滅びやすいものであるかを。それでも人間の魂は、どんなに美しく輝けるものなのかを。

いまさら私に、悪魔はいるのかと誰も聞かなければいいのと思う。私ははつきりと答えられる。「いる」と。私は悪魔を見たのだから。あなたに見せてあげることだってできる。しかし私はそうはしないつもりだ。代わりにあなたが私に、希望はあるのかと尋ねてほしい。私は同じように「ある」と答えるだろう。私は希望の顔を見た。それをあなたに見せてあげられるから。

この文章がどこから始まり、どうやって終わるのかわからない。そもそも終われるかどうかさえも。私はただ書いていくつもりだ。決して自分の罪を抗弁したり、つまらぬ命を生き長らえるためではない。私の魂はもう救われたのだから。

この文章は嘆願書ではなく、弁明書とはなおのこと違う。そんなものは「文章」などではなく、ただ文字を連ねた「文書」にすぎない。文書が凶器になることも私は知っている。何行かの文章が誰かを戦場に追いやり、牢に繋ぎ、何字かの単語が誰かの首に縄をかけるのを私は見た。

私はこの文章が誰かを傷つけることを望まない。ただ、この話が私たちの魂を救ってくれることを

願う。そうでないのなら、この文章は焼き払われるべきだ。すでにずっと前、私が数多くの文章をそ
うやって抹殺したように。

私がこれからする話は、福岡刑務所で出会った二人に関する話だ。そのうちの一人は鉄格子の中に
閉じ込められ、もう一人は鉄格子の外で彼を見守っていた。一人の囚人と一人の看守。一人の詩人と
一人の検閲官。

私はこの窮屈な監房の中で、彼らが生きていた日々を記憶している。高く頑丈な煉瓦塀、日差しが
白く碎ける庭。大きなポプラの木陰、そして救われるべき、くたびれはてた魂の数々を……。

はずれ者としてここへ来た、 去ってゆく今もやはりはずれ者だ

それはベルの音だった。明け方の空気を破る、切り裂くような金属音。私は看守待機室の硬い寝台から、反射的に飛び起きた。窓の外はまだ薄暗かった。何事だろう？ 囚人の脱獄か？ 軍靴の紐を締めていると、長い廊下に一齐に蛍光灯がついた。耳の中を掻き回すベルの音と、ガアガア鳴るスピーカーの雑音に混じり、切羽詰まった声が響きわたった。

「全看守は監房内の全員点呼を実施し、異常の有無を直ちに報告せよ。第三収容棟巡察看守は直ちに中央廊下入口で待機せよ！」

一晩二交代制勤務の夜間巡察は、十時ちようどに始まる。長い廊下の両側に並ぶ監房を確認し、施設装置の点検にかかる時間は一時間五十分。十二時、二時、四時に勤務交代が行われた。

私とチームを組む杉山道造は、四十過ぎの古株の看守で、刃物で削った木彫のような男だった。私が二時に勤務を終えて待機室へ戻ったとき、杉山は寝台に腰を掛け、ゲートルの紐を締めているところだった。杉山は棍棒を腰に差し、無言のまま待機室を出ていった。暗闇の中へ消えていくその後ろ姿は、亡霊のように朧げだった。眠気を抑えつけられた験が、私を黒い眠りの沼へと引きずり込んで

いった。

しかし私は再び眠い目に力を込め、看守部へと通じる中央廊下を走った。赤煉瓦塀の向こうで犬が吠えている。監視塔の照明は青みがかった白刃のように、暗闇を滅多切りにした。警備兵の緊迫した叫び声が聞こえてくる。狭い廊下の両側では、囚人服を着た男たちがとろんとした目で窓の外を見下ろしていた。彼らの目には苛立ちと鬱憤がべつとりとへばりついていて、看守たちは監房の戸を開けて、人員点呼をした。ざわつく声と囚人番号を呼ぶ声が警報ベルの音に入り乱れる。私は、自身の軍靴の音に追われるように走った。

吐き気を飲み込みながら第三收容棟の中央廊下まで走ると、一人の人間が見えた。それまで私が見た中で、最も身の毛がよだつ光景。

悪い夢を見ているようだった。しかし夢ではなかった。むしろ、夢の中へ逃げ込みたいほどぞっとする現実だった。

一階の中央廊下には赤黒く鮮やかな血痕が残されていた。まだ温もりの残る血しぶきが、放射状に飛び散っている。二階廊下の欄干から滴り落ちてきたものだった。天井の梁に巻きつけられたロープの端に、杉山の首が吊り下がっていた。左右に広げられた両腕は欄干にくくりつけられている。血はその左胸から流れ、腹と太股を伝って足の甲を濡らし、足の親指に溜まって床に落ちた。

首を垂れたまま、杉山は私を見下ろしていた。杉山道造。第三收容棟看守部所属看守。二時間前、勤務交代をした巡察担当者だ。全身に身の毛がよだった。

私はそれまで死について考えたことはただの一度もなかった。生きることを考えるだけでも手に余

る日々だったから。死は、十七歳という年齢には似合わなかった。その時私はまだ知らなかった。彼の死が引き起こす渦かざわいに私自身が巻き込まれることを。

私は、彼の死をはっきり見届けた。彼の裸体は蒼白く、すでに冷たくなっていた。白い額に、濃い眉と飛び出た頬骨、ぐっとへこんだ頬のせいとか、鋭い鼻筋とすっとした顎あごのラインが目にとまった。陰影の深い口元は、どこか不自然だった。私は口元を覆って廊下の片隅に駆け込み、何度か空嘔からえずきをして、濡れた目を拭った。

看守たちは、中央廊下に裸体のままぶら下がっている死体を片づけたらいいのか、そのまましておくのかさえ決められないまま、右往左往していた。彼らは心の余裕がないというより、ただ怯えるばかりだったのだ。

私は彼の顔を電灯で照らした。口は固く結ばれていた。いや、封じられていたという方が正しい。下唇から上唇に、さらに上唇から下唇へと続く整然とした七つの針跡。精巧な針仕事だった。犬の群れのような荒くれた囚人連中をたつたひと言で制圧したその唇は、もはや断固として命令を下すことも、囚人に罵声を浴びせることもできない。

私は上下の歯をガタガタさせ、震える体に力を込めた。そうでもしなければ、ねじの緩んだ柱時計のように全身がバラバラになってしまいそうだった。看守長は白い紙のようにまっ白になって怯え、死体を下ろして布を被せ、医務棟に移せとしどろもどろに命令した。看守たちは豆がはじけるように二階に駆け上がり、結び目をほどいた。死体はゆっくり床に下ろされた。

「交代巡査者は誰だ？」

看守長は周囲を見回して言った。私は直立不動の姿勢に戻って復唱した。

「渡辺優——今夜の巡察担当者であります」

看守長は鋭い目で見据え、大きな声で何か言ったが、私の耳には何も入ってこなかった。ただ、昏々と眠る眠りの中まで深く入り込んできた警報ベルの音、外塀の監視塔から鳴るサイレンの音、警察犬の吠える声、ひどく酸っぱい吐瀉物の臭いと、暗闇を裂くサーチライトの光だけが入り乱れていた。そこへ、犯人の侵入路と逃亡路を把握するため建物の入口を搜索していた看守が駆け込んできて叫んだ。

「夜中に足首あたりまで雪が積まりましたが、足跡一つ残っていませんでした。本館の周りにも人が出入りした痕跡はありません」

彼の報告を聞くまでもない。外部から誰かが侵入したのなら、室内に残っているはずの雪解け水や靴跡も見あたらなかった。犯人はどこから来て、どこへ行ったというのか？ 私はむごたらしい夢を見ていたようだった。

先任看守の一人が私の肩を叩き、杉山の遺留品を取りまとめ事件報告の準備をしろという看守長の指示を伝えた。私は二階へと通じる階段を駆け上がった。

二階廊下の手すりの傍らに、杉山の物と思われる褐色の看守服が投げ捨てられていた。杉山は生きている間、ボタン一つ外すことも、襟の芯をただの一度も取ることはなかった。制服こそが似つかわしい人間だった。もしかすると彼は制服が似合うのではなく、制服が彼に似合っていたのかもしれない。看守服は杉山の皮膚であり、看守服を脱いだ彼は何者でもなかった。

荒々しく脱がされたのか、ズボンも上着の袖も裏返しのまま、ボタンは取れていた。上着の左胸

を探ってみたが、そこに凶器で刺された跡はなかった。犯人はまず彼の息の根を止め、制服を脱がして首を吊した後、左胸を鉄製の長い凶器で刺したのだ。膝が飛び出て擦り切れたスポンは無造作に放り出されていたが、その折り目は刀のようにまっすぐだった。無意識に手を入れる癖を防ぐために、スポンのポケットは縫いつけられていた。青みがかって痣のある膝には、何かで擦りむいたような大
小の傷があった。

私はその古い看守服の上着のポケットに手を入れた。温かい鳥の巣の中に手を伸ばす少年のように、私は震えた。指先にひな鳥の羽毛のような何かが引つかかった。横に一回、縦に一回折られた藁半紙は、杉山の唯一の所持品だった。紙を開くと、きちんとした字が現れた。まるで小さな村を形成しているようなその文字の集合は、秘密めいて私に囁いてきた。

おやすみ

はずれ者として、ここへ来た

去ってゆく今も、やはりはずれ者だ

来た時は、五月が優しかった

とりどりの花束を、贈ってくれた

あの子は僕を愛していると言ったし

あの子のお母さんは、結婚さえ口にした

でも今、この世は、暗く沈んでいる

路も、雪にふさがれている

もう、逃げだすみたいに

旅立たなければ

真つ暗闇のなかを

路をひとりですさなければ

月の光に浮かぶ影法師だけが

一緒に来てくれる

一面の雪野原に

獣^{けもの}みちをたどっていかなければ

これ以上ここにいられるか

皆が僕を追い立てているのに

犬どもだって 飼主の家の前で

猛り狂って吠えやがる

次から次へ誰かほかの人へと

愛はうつろうもの

神がそうお決めになったのさ

いとしい人よ、おやすみ

君の夢を破らないように

君の眠りを妨げないように

僕の足音が君に聞こえないように

そつと、そつと、扉を閉め

行きしなに、家の門に

「おやすみ」と書いてゆくから

君が起きたとき

君への僕の思いが見えるように★

私はその文字をじっくり観察した。ペンを止め、ためらっているかのように広がるインクの跡、下手な字画の形や速いようでのろのろした筆致、力を入れたり抜いたりした微妙な筆圧の変化……。私は緊張のあまり息が詰まった。

この謎めいた詩は杉山が自分で書いたのだろうか。あるいは単に誰かの詩を抜き書きしただけなのだろうか。すぐに次の疑問が湧いた。この筆跡が杉山のものでなかったとしたら？ 誰かが意図的にこの紙切れを杉山のポケットに入れたとしたら？ そうだとしたら、誰が、なぜ杉山の内ポケットにこんな詩を入れたのだろうか。

★梅津時比古著『冬の旅』（東京書籍）

訳者あとがき

夏の終わりに、本書の原作者イ・ジョンミン氏に会うため韓国へ行った。翻訳しながら、文章から滲み出てくる雰囲気と、また氏が二〇一二年の秋に東京の韓国文化院で講演した時の原稿からも、この作家はもの静かな方に違いないと想像した。お目にかかると、私が想像したとおりの方だった。

お会いする前に原書についての質問や確認したい箇所、ご了解を得たい箇所などを書き出し、出版社を通して送っておいた。よくよく考えたら、この万事がパソコンの時代に下手な手書きの文面で、しかも私の誤解もあるだろうし、作家の立場を考えたら気分を害するような点もあったのではないかと少し緊張していた。

ところが、互いに挨拶が済むとイ・ジョンミン氏はまず、私を送った質問用紙と何やらびっしり書かれた大きな手帳を広げ、私の質問のすべてについて詳しくお考えを説明してくださった。私は、韓国語と日本語の、同じようである微妙に違うニュアンスの言葉を、日本の背景に合わせた表現にしてもよいかなど、お伺いした。例えば呼称の問題で、韓国語の「あなた」、「おまえ」、「君」をそのまま機械的に訳すと、日本の人間関係ではしっくりしない場合などについてである。また登場人物の仕草から感じ取れる感情について私の受け止め方が間違っていないかなど、気になるところはどんなに些細なことでも、原著を広げてお聞きすることができた。今考えても、何と恵まれた豊かな時間だった。

たかと思う。

イ・ジョンミョン氏は、歴史の事実の中に埋もれたり洩れたりしている事柄に目を向け、虚構の中にもうひとつの歴史の「真実」を描きだす韓国のベストセラー作家である。日本でも『根の深い木』、『風の花園』が翻訳出版され、韓国では『風の花園』は二〇〇八年、『根の深い木』は二〇一一年にテレビドラマとしても放映されて大評判になり、その後日本でも公開されている。

二〇一二年に出版された本作品『星をかすめる風』は、韓国の国民的詩人、尹東柱を主人公としており、本書は発売されるや否や瞬く間にベストセラーとなった。その後も国内で次々と版を重ね、また国外では十一ヶ国で出版されて、世界の出版界でも権威あるイタリアの「バンカレッラ賞」を二〇一七年度に受賞した。この賞の初回（一九五二年）の受賞者はヘミングウェイ（受賞作は『老人と海』）だった。もう半世紀以上の歴史ある文学賞である。

氏の作家としての姿勢を物語る言葉にバンカレッラ賞を受けた時のインタビューがある。最初に、インタビューアが「バンカレッラ賞に輝き、また海外でも出版が相次ぎすぎいですね」と言った時、氏は「それは私よりも詩人・尹東柱の美しい詩とその人生によるものです。詩人の詩と生そのものが人々を惹きつけるからです」と答えている。また、いわゆる歴史小説を書く作家に人びとが向ける、それは「事実」なのか「真実」なのかという問い、つまり「歴史」ではなく歴史の歪曲ではないかという問いに答えて、「私は史実や事実よりも美しい虚構を書きたい。それを読んだ人が、これが本当に真実ならば……と思うような、そういう虚構を書いていきたい」と語っている。さらに小説を書くにあたり最も大事にしていることは？ という質問には「読者との共感です」とも答えている。

[著者]

イ・ジョンミョン

慶北大学国文学科を卒業し、『女苑』『京郷新聞』等新聞社や雑誌社の記者として働いた。集賢殿（朝鮮王朝時代の官庁）学士連鎖殺人事件を通し、世宗のハングル創製秘話を描いた小説『根の深い木』、申潤福と金弘道の絵の秘密を解いてゆく推理小説『風の絵師』を発表した。スピード感と熾烈な時代意識、深みのある知的探求が際立つ小説は、読者の爆発的な好評を得、韓国型フィクションの新境地を切り開いた。小説『風の絵師』は、2008年、ムン・グニョン、パク・シニャン主演のTVドラマに、『根の深い木』は2011年、ハン・ソッキュ、チャン・ヒョク、シン・セギョンが出演するミニシリーズとして放映され話題を集めた。

本書、尹東柱とその詩を焼いた検閲官の物語を描いた『星をかすめる風』は、出版されるや否や瞬く間にベストセラーになり、イギリス、フランス、スペインなど11ヶ国で出版された。この作品は2015年イギリスの外国小説賞にノミネートされ、2017年にはイタリアのパンカレッラ文学賞を受賞した。

その他の作品に、長編小説『良き隣り人』『千年後に』『ひまわり』『最後の遠足』『悪の追憶』『天国の少年』などがある。

[訳者]

鴨 良子（かも よしこ）

1950年、青森県生まれ。日本基督教団弘前教会副牧師、児童養護施設・青少年自立ホーム指導員を経て、1982年8月渡韓。徳成女子大学、同徳女子大学日本文学科非常勤講師、同専任講師を務めるかたわら、ソウル大学附属語学研究所で韓国語の基礎を学び、87年東国大学国文科大学院修士課程に入学、89年同課程修了。91年春帰国。著書『ソウル、韓国語世界への旅 私の80年代』（明石書店）、訳書『イエスのまわしを取る』（明石書店）がある。

The Investigation 별을 스치는 바람

© 2014 by Jung-myung Lee

All rights reserved.

First published in Korea by EunHaeng Namu Publishing Co., Ltd.

This Japanese language edition is published by arrangement with KL
Management, Seoul, Korea

星をかすめる風

2018年12月25日 初版第1刷発行

著者 イ・ジョンミョン

訳者 鴨 良子

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／桂川 潤

組版／三冬社

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1777-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。